

論文名 : Is early enteral nutrition better for postoperative course in esophageal cancer patients ? (要約)

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 小林 和明

---

[背景と目的]

近年、様々な外科領域で術後早期からの経腸栄養を行うことが早期回復に結びつくことが報告されている。本研究の目的は食道癌術後の早期経腸栄養の有用性を後方視的に評価することである。

[対象と方法]

1996 年 1 月から 2010 年 12 月までに新潟大学医歯学総合病院で胸部食道癌に対し 3 領域リンパ節郭清を伴う開胸食道切除術を施行した 103 例を対象とした。

術後経腸栄養開始日と排ガスまでの日数、アルブミン製剤使用量、術後 7 病日のアルブミン低下値との相関関係を調査した。さらに術後 3 病日までに経腸栄養を開始した群を早期群 42 例、4 病日以降に経腸栄養を開始した群を後期群 61 例に分類し、術后排ガスまでの日数、アルブミン製剤使用量、術後 7 病日でのアルブミン低下値、SIRS 離脱までの日数、術後感染性合併症の有無、中心静脈栄養併用の有無について比較検討を行った。

[結果]

術後経腸栄養開始日と排ガスまでの日数、アルブミン製剤使用量は有意な正の相関を認めたが、アルブミン低下値とは有意な相関を認めなかった。早期群 42 例では後期群 61 例と比較して有意に中心静脈栄養併用、アルブミン製剤使用量が少なく、また排ガスまでの日数、SIRS 離脱までの期間が短縮された。アルブミン低下値は、早期群で有意に術後低下を認めた。術後感染性合併症の割合は両群間で差を認めなかった。

[考察]

早期経腸栄養施行群では術後中心静脈栄養の併用、アルブミン製剤使用量を減少させることができ、消化管機能の回復、SIRS からの離脱を早めることができると考えられた。食道癌術後 24 時間以内での早期経腸栄養を施行することにより術後感染性合併症を減少させることができるとする報告は散見されるが、本研究では術後感染性合併症の割合は両群間で差を認めることはできなかった。しかし、明らかな利点も多いと考えられ食道癌術後の早期経腸栄養は安全で有用な治療法であると結論づけた。